

出張所が一時閉鎖されて以降、コンゴブラザビル教会と本部の関係は、年に数回のおぢばからの訪問やノソング会長の帰参、またコンゴ人信者のおぢば研修などで保たれていった。現地に常駐する日本人がいないことで、教会の様子を伝えるものやおぢばがえりの際の事務連絡など、ノソング氏と海外部との間で直接にやりとりする手紙やファックスが多くなっていった。その中でノソング氏が何度も繰り返し訴えていたのは、日本人布教師の派遣で、その主な理由として、教会会計を任せられる人、教義を伝達できる人、そして鼓笛活動の指導者が欲しいということだった。

日本語を理解するコンゴ人信者の養成もノソング氏が繰り返し要望していた。同氏は以前から、コンゴ伝道の中で、海外部スタッフの限られた人間だけが通訳・翻訳することに不満を持っていた。話し合いの末、彼にとって都合が悪い結果となると「自分の言っていることを正確に伝えていない」また「通訳自身が自分の意見にすり替えている」などと言った。海外部からの通訳を拒否することもあった。

彼の要望を受け、出張所が閉鎖される1989年4月から、二人（内一人は会長の娘）のコンゴ人信者が日本語研修も兼ねて「おやさとふせこみ課程」で1年間の研修を受けている。また、ノソング氏が出張所閉鎖の直後に帰参した時には、同じく「おやさとふせこみ課程」に入れようと長男を同行させている。ただ彼は、査証の都合上、聴講生として3カ月の研修だった。確かに当時の教会には日本語が分かるコンゴ人がいなかったの、ノソング氏のこの思いはもっともなことだと思われるかもしれない。しかしそれ以前に、日本語を習得したコンゴ人信者も育てていたものの、彼らがノソング氏との人間関係の中で教会に繋がっていかなかったというのも事実である。

おぢばからの訪問は、教義研修会の開催という形で行われた。1991年と1992年に、高部正雄アフリカ課長が中心となって、海外部のフランス語スタッフとともに教会で教義研修を開催した。教典の講義に加え、おてふりや鳴り物の指導の他、タブとめ後には高部課長が講話を行った。現在教会で毎年開催されている1週間から10日間にわたる教義セミナーのような形式ではなかったものの、日本人布教師がいない教会において、教義の伝達としては重要な研修会と位置づけられていた。ただ、開催されたのはこの2年間だけだった。というのも、90年代に入ってコンゴの政治体制が大きく変わり、その中で内戦という社会混乱の時代に入っていったからだった。

1991年3月、これまでのコンゴ人民共和国からコンゴ共和国へと国名が変更になり、国旗も独立当初の三色旗に復活した。その背景には、1990年6月、フランス語圏諸国会議の中で経済援助の代償として民主化を求めたフランスに代表されるように、先進国がアフリカ諸国に民主化、とりわけ複数政党制の導入を要求したということがある。他のアフリカ諸国同様、コンゴも複数政党制を導入し、1970年から始まったコンゴ労働党の一党独裁体制に終止符が打たれた。1992年には初の民主選挙が開催され、パスカル・リスバが大統領に選出された。1993年には当時の海外布教伝道部長がこの大統領に表敬訪問している。ただ急速な民主化の流れは、一党独裁体制の中で押さえられていた

民族間の対立を表面化させることになり、コンゴにおいてはブラザビルを挟んで北と南の対立を浮き彫りにする結果となった。

その直後の5月から、国会（下院）議員の開票を巡って、リスバ大統領の与党と一党独裁体制から先の選挙で野党になったサスー・ンゲソ派とが対立し、そこへさらに別の一派が加わって社会はますます混乱した。開票結果は大統領派がほぼ過半数を占めたが、野党側が12カ所の選挙区で不正があると指摘、選挙のやり直しを要求する。しかし大統領側は2回目の投票を強行したことで、混乱が大きくなり、街には非常事態宣言が発令された。

状況が少し落ち着いた直後の9月にブラザビルを訪問した高橋利行氏（現パリ日仏文化協会会長）は、ノソング氏の案内で襲撃や略奪された地区を見て回わり、その報告書の中で「教会でも直ぐ裏手のバーが焼き討ちされたり、銃撃戦の音が響いたときは生きた心地がしなかった、人生で経験したことのない最悪の事態」というノソング氏の弁を伝えている。

しかし、同年12月から翌年の2月にかけて、再度対立が表面化し、教会がある首都の南部を中心に殺戮事件が相次いだ。犠牲者は数百とも数千とも言われているが、確かな数字は分からない。ノソング氏はその時の様子を手紙で「和平のための努力が政府、国会、政党、その他の責任者によって行われています。しかし、彼らこそ今の危機的状況を創りだした張本人なのです。もしこの状況が進み、兄弟であるコンゴ人同士が殺戮し合うようなことになれば、何と恐ろしいことでしょうか。政治家の顔ぶれは60年代より何も変わっていません。かつて偉大な革命家であったこれらの責任者達は、今日真の民主主義者にはなれずにいるのです。」と述べている。教会近辺の人々が避難する中、また弾丸が教会と会長宅の屋根に落ちた中でも、教会に残り、おつとめを続けたノソング氏は「二代真柱様との約束は守る」とも綴っていた。しかし、その彼もその後によってくるさらなる「コンゴ人同士の殺戮」は予想できなかった。

国名や国旗、国歌を変え、複数政党制を導入して新たに民主主義国家を樹立したはずが、逆に民族対立を煽る結果となり、これまで「兄弟」であったはずの同士が殺し合うようになるのは、本当に皮肉なことである。コンゴ伝道における異文化とのさまざまな接触の中に、「内戦」というキーワードがあることが再認識させられた。かつて清水國弘二代会長時代、教会を挟んでの銃撃戦の中で、おつとめをつとめたということがあった。さらに遡れば、1963年に高井猶久氏が初めてコンゴに行ったのは、日本人布教師の派遣を求めるノソング氏からの電報で「暴動が起こったんで布教師をよこすのを待ってくれ」というような状況の中でのことだった。ただ、この90年代になってコンゴが経験した3度の内戦は、その規模において、ノソング氏が「人生で経験したことのない最悪の事態」というように、これまでの社会情勢と比較できないものだった。

グローバル化する社会において、政治や経済が世界規模で複雑に絡み合い、武器が近代化され、民間人も巻き込む犠牲者が数千、数万単位にもなる紛争の中での伝道は、「平和」が大前提ともなる「陽気ぐらし世界」を標榜する天理教に対し、大変大きくそして重たい課題を突きつけている。